

第 60 回 令和 7 年 7 月 9 日（水）

勝利至上主義の功罪について。

私たちから見ればオリンピックに出場するアスリートはすごいと思いますが、金メダルが取れなかった柔道選手はまるで負けたかのように落ち込んでインタビューを受けます。

オリンピックに出られたことがすべて帳消しになったかのような様子で涙を流して試合場を後にします。

高校日本一を競うインターハイも日本一になるチーム以外はすべて負けます。たとえ日本一が目標のチームが地区の 1 回戦で敗れたとしても、そのチームの努力をけなす権利は誰にもありません。負けることですべてが無駄になるという考えは競技を否定しているものだと思います。

戦争は相手の命を奪います。勝った国は負けた国から賠償金を取り、領土を奪います。戦争は忌むべき行為です。肯定される要素はまったくありません。

国と国が本気で熱狂するサッカーのワールドカップは戦争とどこが違うのでしょうか。大きな違いは相手の命を奪わないことです。勝者が敗者を貶めるようなことがないということです。

バスケットでもサッカーでも試合が終わるとお互いの監督は相手の監督と握手をします。真剣な戦いであったとしても、終了したら相手を称えあうことが大事だからです。

行き過ぎた勝利至上主義はこれを否定することがあります。判定が納得できずに最後の礼が出来なかったり、相手との握手を拒んだりする光景がたまに見られます。それは競技の本質を忘れた行為だと思います。

私は引退がかかった最後の大会でいつも選手にこう言いました。「これは必ずどこかで負ける大会だ。そこで 3 年生は競技が終わるけど、どこで負けるかは関係ない。相手も引退がかかっているから、すべての試合が決勝戦だ」

そして負けて引退が決まった選手とは必ず一人ずつ握手をして声をかけて終わりました。負けたという事実のみを胸に引退してほしくなかったのも、勝敗ではなく継続した努力を労いました。

勝つことはもちろん素晴らしいことです。そこまでの努力が実ったことは称えられてしかるべきです。ただし、勝つということは負ける相手がいてはじめて成立します。相手に感謝する気持ちを持ってほしいと思います。

私が尊敬する先生は、勝っても負けてもいつも私のチームを褒めてくれました。そのチームと戦うのが本当に楽しみでした。私の大切な思い出です。